

前回は、「罪」とは人間としての〈的を外した行為〉であり、〈良心〉がわたしたちの行為を、それが「人間としての的を射ているものかどうか」を判断している。その〈良心の声〉をキリスト教では《神の声》として受け取る — ということを書きました。今回は、わたしたちが〈多くの人々の中で生きる存在〉であるがゆえに問われていることについて考えていきます。

### また、むかし話をひとつ ……

中学3年生の「社会科」では、公民的分野を学習します。政治・経済の勉強です。そこで「人間は社会的存在である」ことを学びます。わたしたちがいかに多くの方々のおかげで生活し、生き方の面でも影響を受けながら人生を過ごしているか…。中学生の頃は頭では理解したと思っても、実感が伴わなかったのではないのでしょうか。あなたが「ひとりでは生きていけないものなんだ」ということを深くここで受けとめたのは、いつの頃でしたか。

わたしが子どものとき、「世界は自分を中心にまわっている」みたいな感じで過ごしていたような気がします。〈一人っ子〉のわたしは特にその傾向が強かったと思います。それが180度ひっくり返ったのは、15歳で東京に出たときでした。「医者になりたい」というわたしの夢の実現のため、父は俳句の恩師でもある水原秋桜子（みずはら しゅうおうし）先生の出身校・獨協学園を受験することを勧めました。当時、桐生高校受験でさえ「ヒーロー」言っていたわたしが、東京の高校を受けても合格する可能性は限りなく「ゼロ」に近いものでした。ただ、「よしっ、受ければ東京に行ける！もしかしたら、酒井和歌子に会えるかもしれない！」なんてアホなことを考えたわたしは、ものすごいパワーがわき出し、それまで11時前には布団の中にもぐり込んでいたのに、1時～2時まで机にかじりつくようになりました。それが受験の年のお正月。試験日は2月1日だったと思います。1ヶ月もない時期でした。

「目の色が変わる」とよく言いますが、きっと変わっていたはずですよ（別に、毎日カガミを見ていたわけではありませんが）。「東京に行きたい！」「ひとりになりたい！」「酒井和歌子に会いたい！」— この〈3つの願い〉がエネルギーでした。「医者になりたい」という希望は、どこかへわすれていました。（お父さん、お母さん、ゴメンナサイ。いま聞いたら怒るだろな…。）

そして合格発表の日。父の友人の親戚のおばさんが発表を見に行ってくれました。お昼になっても連絡はありません。「やっぱりダメだったか…」。覚悟はできていました。午後4時過ぎ、父の友人が家に来て「合格者番号の最後に、《補欠合格》っていうのがあって、そこにあったそうだとのこと。「ゲッ、補欠…。ってエことは、ビリで合格か…」。両親も「入学してもきっと頭のいい子がそろっているだろうから、落ちこぼれてしまうのでは…」と考えたにちがいません。しかし、わたしは〈ほけつ〉合格で、成績はいま〈オケツ〉だけど、きっと何とかなるさ。何とかすればいいんだろ」、「なん

たって、ワコちゃん（酒井和歌子の当時の愛称）に会えるかもしれない！」と、気楽なものでした。結局、わたしの〈やる気〉に圧倒された（？）両親は東京行きをゆるしてくれました。

入学後、硬式野球部に入部したのはよかったのですが、それがまた弱いなの！ 聞いたこともないような高校（田舎者なので当たり前ですよね）に、ワールド負けの連続（わたしも決して上手いほうではなかったもので、大きなことは言えませんが …）。あまりやる気のないチャランポランな先輩たちもいてイヤになり、夏には退部。しかし、2学期に《恵み》の出会いがありました。ワコちゃんに会えたわけではありません。体育の授業でサッカーと出会ったのです。野球もチームプレイですが、サッカーのそれは当時のわたしにとって野球とは別次元のものでした。よくラグビー用語として使われますが「一人はみんなのために・みんなは一人のために」という、それまでのわたしの辞書にはなかった言葉を見つけたのです。くわしいことを書いていると、この『塾』の趣旨から外れてしまうので省略しますが、「自分という人間は、多くの人たちによって生かされている、自分もほかの人たちのために何かしないと …」という意識が芽生え始めた出会いでした。

### ◇わたしたちはみな、知らず知らずのうちに周りの人に迷惑をかけている

人間は〈支え・支えられて生きる存在〉です。しかし一方、〈傷つけあい・苦しめあう存在〉でもあることを忘れてはいけないと思います。前回お話した罪と良心の問題の背後には、『わたしたち一人ひとりが人間として何を大事にして生きようとしているかという問いが潜んでいることを見落としてはならない』と、森先生は私たちに忠告しています。

『わたしたち一人ひとりには、幸せになる権利があり』、『自分の願いを満たそうとすることはゆるされることです』。だれでも「幸せになりたい」と思いますし、だからこそ「幸せってなんだろう。どうすればなれるだろう」と考えます。それが人生の大きな目標にもなります。しかし、自分だけが幸せになろうとすると問題が起きます。だから、『「他の人の幸せになる権利を侵さない限り」という条件が付きまします』。「自分だけ幸せになればいい。ほかの人たちはどうでもいい」というわけにはいきません。

わたしたちには『自由が保証されてい』ます。この自由を『「誰にも迷惑をかけなければ、何をしようが、本人の勝手だ」と』解釈してしまうと、『それは行き過ぎのように思えます』。何年か前（きっと現在もおこなわれているのでしょうが）、「援助交際」とよばれる女子中高生の不純異性交遊が問題になりました。「なぜそんなことをするのか」という問いに、彼女たちが「私の勝手でしょ。誰に迷惑かけているのよ。」と居直っていた姿を、テレビで見たことがある方もいらっしゃるでしょう。理由はそれぞれあるのですが、〈たったひとりしかいない自分〉、〈いのちを与えられている自分〉を見失った少女たち … 。〈自由とは何か〉 — 彼女たちだけではなく、そんな社会状況を生んだわたしたちにも突きつけられた問いであると思います。

私たちの人生は直接的・間接的に、『人間としての弱さ、未熟さ、そして自己中心性から、周りの人の人生を傷つけたり、苦しめたり、悲しませたり、負担をかけたりしています。こういう意味で、自分には罪がないと言える人はいないのではないか』と森先生

は【罪】の問題に言及します。次回はキリスト教が示す罪とは、具体的にどんなことなのかを考えてみようと思います。

【引用した書籍】

- ・森 一弘 『キリスト教入門 Q & A』（教友社、2008）
- ・山田忠雄 他 『大きな活字の 新明解国語辞典 第七版』（三省堂、2012）
- ・大野 晋 他 『角川 必携 国語辞典』（角川書店、2004）